

---

# 東方project2次創作～俺が幻想入りしたZE!!～

蒼海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方project 2次創作〜俺が幻想入りしたZE!!!〜

### 【Nコード】

N7018X

### 【作者名】

蒼海斗

### 【あらすじ】

主人公夜霧炎耶はある日出会った素敵な素敵なお姉様八雲紫によって幻想郷に拉致されて生活するはめになる  
そしてそこで色んな妖怪やら人やら吸血鬼とか幽霊とかに出会い生活する物語になる予定!!

俺が幻想入りしてしまいました！！（前書き）

初めまして蒼海斗です。

これは文才などが無い俺が思い付きで書いた小説です！

見苦しいところなどもあるでしょうが見てやってください！

俺が幻想入りしてしまいました！！

10月15日俺はこの日を永遠に忘れないだろう  
何故なら俺はこの日から神秘的な体験をするのだから物語の発端は  
ある一人の若いお姉様にあつた事に始まる

〈回想〉

お姉様『フッフ坊やこちらにいらっしやい』

俺『うん？あそこに金髪魅惑のボディの人が！！なるほどこれはい  
わゆる逆ナンというやつか！！どうやら遂に俺にも春が来た！！』

友人A『ちよつとまでよあの人どうみても胡散臭いぞ近づかない方  
が…て聞いてないし』

友人B『おいA彼奴はほつといてもう帰ろう』

友人A『そうするか彼奴の事だしなんとかなるだろうじゃあな炎耶<sup>えんや</sup>』

炎耶『うん？じゃあなモブキャラ2人』お姉様『ふーん貴方炎耶君  
ていうの良い名前ね苗字は何かしら？』

炎耶『ありがとうございます！！苗字は夜霧<sup>やぎり</sup>です！』

お姉様『そう夜霧ね…ああそういえば私の自己紹介してなかったわ  
ね私の名前は八雲紫よろしくね夜霧炎耶君』

炎耶『よろしくお願ひします八雲さん！！』

紫『それで1つ貴方にお願ひがあるのよ聞いてくれるかしら？』

炎耶『貴女の頼みなら何でも聞きますよ』

紫『そう嬉しいはなら貴女幻想郷に来なさい』

炎耶『どこですかそこ？』

紫『此所とは別の世界よ後これは命令であつて貴方に拒否権は無い  
わ幻想郷へ一命様ご案内！』

炎耶『はい？どういう意味でウワァア！』

突如地面にスキマがあらわれを吸い寄せられるように落ちていった

⋮

俺が幻想入りしてしまいました！！（後書き）

最後まで閲覧ありがとうございます！！

感想などをくれるとありえないぐらいに喜ぶのでくれると有難いです！

射命丸文登場！（前書き）

第2話です！

## 射命丸文登場！

突如地面にスキマがあらわれを吸い寄せられるように落ちていった…  
　　～スキマの中～

炎耶『ひい！！なんだよ気味悪い！！うわちよつとこんな現実だなんてありえねえ！！』

「スキマ内部でなにがあったかは皆様のご想像にお任せしますww。」

～幻想郷妖怪の山～

カパとスキマが開き炎耶は空から落ちる

炎耶『あははは！！ママパパ見て僕空飛んでるよ！あははは………』  
スガーンと勿論炎耶は空を飛ぶなんてチートは持ってないので墜落？『あやや？今の音はなんでしよう？何やらスクープの予感ですね！！行ってみましょう！！』

～墜落現場～

炎耶『うん？俺もしかして生きてる！？嘘だろ生きてるなんて空から落ちて生きてるなんて普通はありえないぞ！？』

？『それでも生きてるなら良かったじゃないですか貴方の考えてるように普通なら死んでましたよだからラッキーじゃないですか』

炎耶『え？うんまあそりゃそうだ生きてるならラッキーだな。ところで貴女は？』

？『初めまして！！私は清く正しい新聞記者射命丸文です！よろしくお願いしますね人間さん？』

炎耶『えつと夜霧炎耶ですよろしく』

文『炎耶さんですねわかりました。ところで貴方は一体どうして空から降って来たのですか？どうして生きてるのですか？』

炎耶『ちよつ待って下さいよ射命丸さん！！そんな一変に質問されても答えられませんよ！』

文『あやや少し急かしてしまいましたね。ではまず1つ質問ですよ』

ろしいですか？』

炎耶『あっはい』

文『貴方は一体どうして私の姿を見て何の反応も無いのですか？普通の人間なら大抵私を見ると何かしら反応を示すのですが貴方は何も疑問に思わないのですか？』

炎耶『疑問で言われてもな…え？羽が生えてる？というか空飛んでることい？何故？どうして？Why？』

文『まさか今更気付いたんですか？…』

炎耶『はい！！』

文『ふふ貴方は面白いお人ですね。私が羽が生えていて飛んでるのは鴉天狗という妖怪だからなのですよ』炎耶思考（妖怪？鴉天狗？射命丸文？はてなんだらうこのキーワードは何か引っ掛かるんだよなそういえば八雲紫さんと会ったときも何か引っ掛かたんだよな…）  
文『どうなされましたか？炎耶さん急に真剣な顔をして？』

炎耶『いやいや何もありませんただの考え事ですよ』文『炎耶さんそれともう一つ聞きたいのですがこれからどうするつもりですか？』

炎耶『そりや家に帰る…いやそれが無理だから言ってるんですよ

…』

文『はい貴方の想像してるように彼女に連れて来られたならここで生活するしかありませんね』

炎耶『なら取り合えず「人間」を探してみますよ山から降りればまあ会えるでしょうし色々世話になりましたありがとうございます  
射命丸さん』

文『炎耶さん待って下さい！！』

炎耶『なんですか？』

文『私貴方に興味を持ちましたなので私が責任を持って貴方を預かりましょう！！』

炎耶『どういう意味ですか？』

文『貴方のその思考の切り替えの早さが気に入ったので私と一緒に暮らしましょうという意味です！！』

炎耶『はい？俺が射命丸さんと同居？』

炎耶（ちよっ！！もしやこれはフラグという奴かそうなのか！！！そのなのだろう！！！）

文『それとも人里に行きますか？』

炎耶『是非射命丸さんと同居さしてください！！』

文『あやや即答ですね…それと同居するなら私の事は気軽に「文」と呼んでくださいね』

炎耶『わかったよよろしく頼むよ「文」。』

文『ええこちらこそよろしくお願ひします炎耶さん』文（ふふ彼には私と過ごす分たっぷりと仕事を手伝ってもらいますよう）

炎耶（拜啓お父様お母様僕は遂に女の子と一緒に楽しく生活できるようです幻想郷に来て良かった！！！）

射命丸文登場！（後書き）

最後まで閲覧ありがとうございます！！

飛べない人間はただの人間（前書き）

三話です!!

小説を書くって難しい…

## 飛べない人間はただの人間

文との同居生活が始まり早半年予想していた甘い甘いイベントは起きずに炎耶は毎日仕事を手伝われていた…

文「炎耶さん取材に行きますよ！！今日は先日紅い霧を出していた吸血鬼の居る紅魔館です！着いてきて下さいよ？」

炎耶「なあ文何度言ったらわかってくれるんだ…俺はお前みたいに飛ぶなんて事は出来ないんだよ」

文「まだ飛べないんですかあんなに修行したのに！？」炎耶「人には出きる事と出来ない事があるんだよ…」炎耶（でも正直何故俺が飛べないのは才能のせいじゃないと思うんだよな…なんせ文以外にも教わったのだからな…）

（回想）

文「炎耶さん飛べるようになりましょう！！」

炎耶「唐突に何言ってるんだ文？」

文「だって貴方が飛べたら一緒に取材に行くとき楽じゃないですか」

炎耶「いや俺は今までどうり走って行けば」

文「それだったら貴方を待っている時間が勿体無いじゃないですか！！！」

炎耶「なら1人で行けばいいんじゃない？」

文「いいえそれは駄目です！！今じゃ文。新聞は私と貴方の新聞ですから貴方もいかなければ駄目です！！」炎耶「うーわかったよ…どうやったら飛べるようになるんだ？」

文「そんなの簡単ですよこうちよつと念じればふわーと飛べますよ！！！」

炎耶『なるほど念じれば飛べるふわーと』

……

炎耶『あれ？飛べない？飛べないぞ文？』

文『あやや普通それで飛べるんですがね？』

炎耶『なら念じれば飛べるふわーと』

……

炎耶『飛べない!!』

文『ままあ最初は飛べないでしょうがきつと直ぐ飛べますよきつと

……』

炎耶『そうであると信じるか……』

一週間後……

炎耶『I can fly! I can fly!!俺は飛べる!!俺な

ら飛べる!!飛べ飛ぶんだ俺!!』

炎耶『……飛べない』

文『あややまだ飛べないんですか？』

炎耶『うん…飛べない』

文『まああもうすぐ飛べますよもうすぐ!!』

さらに一週間後

炎耶『文、俺はしばらく出掛けてくる!!多分一週間後には帰る!

!!』

文『何処へ行くつもりですか!?!その間修行はどうするんですか!

?』

炎耶『行って来ます!!』文『行ってしまいましたか……』

「博麗神社」

?『あら貴方が1人で来るなんて珍しいじゃない?何か用?』

炎耶『霊夢、お賽銭やるから空の飛び方教えてくれ!!』

霊夢『わかったわ任せなさい1日で飛べるよう鍛えてあげるわ』

## 1 週間経過

霊夢『炎耶貴方ふざけてるの？外来人で私に飛べるよう鍛えてくれて言ったのは何人もいるけど皆1週間も在れば余裕で飛べてるわよ？貴方ふざけてるでしよう？』

炎耶『……………真面目にやってます』

霊夢『まったく貴方才能が無いんじゃない？それなら魔理沙に教わった方が良いわよ？』

魔理沙『呼んだか霊夢？』霊夢『噂をすればなんとやらね。魔理沙、炎耶が空飛びたいんだって教えてあげなさいよ貴方』

魔理沙『いいぜなら炎耶この幕に跨がるんだそして飛びたいと念じるんだすれば普通飛べるぜ？』

炎耶『なるほど……………飛べない!!』

魔理沙『炎耶お前才能がなくなってもこれは誰でも使えるぞ？』

炎耶『帰る……………』

魔理沙『まあ頑張れ…きつと飛べるさきつと』

霊夢『そうよ私があんだけ鍛えたんだから飛べるわよ!!』

炎耶『2人ともありがとう…』

## 「妖怪の山」

文『やつと帰りましたか!!一体どこいったんですか!!』

炎耶『まあ色々だ』

〈回想終了〉

炎耶（みたいなきごとがあったのになんで飛べないんだ俺は？）

文『飛べないなら仕方ないですねなら走ってきてくださいよ?』

そして文と炎耶は紅魔館へと向かった

飛べない人間はただの人間（後書き）

最後まで閲覧ありがとうございます!!

感想とかも書いてくれると飛んで叫び喜びます!!

いざ行かん紅魔館！！（前書き）

第4話です！！

こんなに速く更新するのは最初だけ…

いざ行かん紅魔館！！

文『さあ紅魔館に取材に行きますよ！！飛べないなら走ってから来て下さいよ？』炎耶『ハイハイわかりましたよ走って行きますよどうせ俺は飛べませんよだ』

～行間～

？『ふふ彼が飛べないという事はちゃんと能力が効いてる見たいね彼が万一に能力を覚醒させたら大変な事になるものねそれだけは阻止しないとならないわ これからも彼を監視を頼むわよ』

『わかりました 様。しかし一体何故彼が能力を覚醒させたら大変な事になるんですか？』

様『それは内緒よフフ』

『はあ内緒ですか分かりました。さあ〇私と一緒に監視しを続けようか？』

『あれ〇何処に行ったんだ〇？〇—————！！』

～行間終了～

～霧の湖～

炎耶『確か紅魔館はこの辺だと思っただが…？』

？『そのあんた！！あたいの縄張りで何してるのよ！！』

大妖精『ちよつとチルノちゃんこの人なんにもしてないよ？』

炎耶『あたいの縄張り？誰だつてうわあバカだ』

バカ『アタイはバカじゃないもん！！』

炎耶『いやだつて名前もバカで表現されてるしさ』

大妖精『あつ本当だバカになってますね』

バカ『あんたアタイを舐めてたら痛い目にあうわよ人間なんてあたいに掛ければ余裕で倒せるんだからね!!』

大妖精『チルノちゃん炎耶さんもう行ったよ…』

バカ『え?あ、こらまで炎耶今日こそはあんたを倒すんだから!!』

炎耶『ちつもう追い付いて来たか?なら仕方ないよしわかったチルノ!!この問題を解いたらお前はさいきよーだ!』

問題 1 + 1は何?

正答: 2

バカの答え: 9!!

炎耶『残念ハズレ今日も俺の勝ちだな!俺は急いでるんだここで遊んでる暇は無いんだじゃあなバカと大妖精』

大妖精『あ、はいさよなら炎耶さん。ねえチルノちゃんこの問題前も間違えてるよ…』

バカ『違うもん9が答えだもん皆が間違ってるだけだもん!!』

大妖精『チルノちゃん…』

〔紅魔館〕

炎耶『やつとついた!!文は何処に居るんだ?もう中に入ったのか?じゃ俺も入らしてもらうか門番も居ないようだしでも変わった所にあるんだな入り口壁の一部が入り口とはな…』

門番『今日も平和ですねそういえばさっき文屋さんがもう1人連れが来るって居てましたけどきませんねなかなか…』

そして炎耶は検討違いの所から紅魔館へと入っていった…

いざ行かん紅魔館！！（後書き）

最後まで閲覧ありがとうございます！！

今回最初に入れた解りにくい行間に書いてあるように『あの人が』  
炎耶に空を飛ばないようしくんでます

その理由として能力の覚醒を阻止するですがこの能力というのはこの物語の核心部分にあたるため今の段階じゃ何もいえないので想像にお任せします

紅魔館にて（前書き）

最新話です！！

## 紅魔館にて

炎耶『お邪魔しますうわっなんだこりや右見ても本左見ても本、本だらけじゃないか！紅魔館の正体は図書館だったのか！』

？『そんなわけないでしょなんで紅魔館の正体〓図書館になるのよここは紅魔館の部屋の1つの図書館よ不法侵入さん』

炎耶『不法侵入とは失礼な！ちゃんと入り口から入りましたよ！』

？『入り口？ああなるほどそういう事ね魔理沙が勝手に開けた穴を入り口と勘違いしたってことね…』

炎耶『あれが正しい入り口じゃなかったの？』

？『はあ貴方はバカなの？氷精でもそこまでバカじゃないわよ…で何のようでここに来たの？』

炎耶『取材さこの前異変が起きたというからそれについてのね。おっと自己紹介してなかったな俺は夜霧炎耶だ文と一緒に文文。新聞の記者をやってる』

？『ああ文屋ねそれならもう1人来てたわよ今はレミイの所に居るみたいよ。それと私はパチユリーノレッジよ』

炎耶『でパチユリーさんそのレミイとかいう人は何処に居るの？』

パチユリー『案内するわよあの子の従者がね、咲夜？』

鈴を鳴らす

咲夜『どうしましたパチユリー様？』

炎耶『えっ？今何があつた！？一体どつから来たんだ？』

咲夜『どうなされましたかパチユリー様？』

パチユリー『その人間をレミイの所に連れて行って頂戴』

咲夜『わかりましたでは着いてきて下さい』

～廊下～

炎耶『えっと咲夜さんていうんだっけ？俺は夜霧炎耶よろしく』

咲夜『そうよ十六夜咲夜よ』

炎耶『なあさつきの瞬間移動は能力かなにか？』

咲夜『あれは瞬間移動なんかじゃなくただ時を停めただけよ別に凄くなんかないわよ』

炎耶『いや充分凄いでしょうそれ…』

咲夜『着いたわよここがお嬢様のお部屋よ』

咲夜『失礼しますお嬢様お客様をお連れしました』

レミリア『そう、ありがとう入りなさい』

炎耶『失礼します……………』

レミリア『はじめまして私がこの館の主レミリアスカーレットよ。』

炎耶『夜霧炎耶です文の連れにあたる者です』

炎耶（ヤバイ何吸血鬼でもっと怖そうなイメージだったのにこれは幼女じゃないか！！駄目だ言っつては駄目だ耐えるんだ俺さもないと死ぬ！！）

レミリア『それで貴方達は私がこの前異変を起こしたから取材に来たのね』

文『はいそうです。先日レミリアさんが起こされた異変通称「紅霧異変」について起こした理由博麗の巫女と白黒の魔法使いと戦った感想などをお聞きしに来ました』

炎耶『答えてもらえますか？』

レミリア『そうね…お断りよ』

炎耶『どうしてですか？』

レミリア『別に理由なんてないわよそれに答えないといけない義務なんて私にはないのだからお断り』

文『さつきは答える気満々だった気がするのですが違いましたか？それとも何か条件でも出すつもりですか？』

レミリア『そうよ答えるつもりでいたわよでも彼に興味が沸いたのよ。炎耶貴方子供と遊ぶのは好きかしら？』

炎耶『また唐突ですね。嫌いでは無いですよ？』

文『ちよつとレミリアさん貴女がさつき話して下さった彼女と会わすつもりなんですか！？』

咲夜『お嬢様私もそれは反対です！いくらなんでも妹様と逢わしたらずく死にますよ！?』

レミリア『咲夜？貴女は一体何時から私の意見に口出しできるほど偉くなつたの？天狗も客人ごときがあの子を理解してるような口を叩かないで頂戴』

咲夜『っ！！申し訳ありませんでしたお嬢様！！』

文『客人だからなんですか炎耶さんは私のパートナーですあの人会わす事は私が絶対にさせません！！』

炎耶『文：そこまで必死に言わなくてもたかが子供の遊びに付き合うだけだろ？そのくらいやりますよレミリアさんその代わり取材ちゃんと受けて下さいよ?』

レミリア『フフいいわよ約束は守るわよ私もそこまで悪者じゃないから』

文『そんな炎耶さん貴方の遊び相手というのはレミリアさんの妹で「ありとあらゆる者を破壊する程度の能力」を持つてるんですよ！それに彼女は力の制御がちゃんと出来てないんですよ貴方なんて直ぐに木っ端微塵ですよ！！』

炎耶『……………レミリアさん他の方法で手を打ちませんか？俺実は子供嫌いなんですよハハハ』

レミリア『そこは格好よく「男に二言はない！！どんなやつでも遊んでやるさ！！」とか言うべきでしょ？それと残念ながら貴方に拒否権なんて者は無いわ。天狗安心しなさい命の保証はするわでももしも邪魔するなら保証しないわよ?』

文『わかりましたなら本当にピンチの時は私も助太刀さしてもらいます』

炎耶『俺の意見なんか反映されるはずが無かったですね…』

レミリア『着いて来なさいあの子の所へ案内するわ』

炎耶『そうですかじゃ文後はよろしく俺帰るから！』シュッナイフが飛んでくる

咲夜『ふざけるのも大概にしなさい?』

文『そうですねよ貴方がやると言ったんですからまあ私がピンチの時は守りますから安心してください』

炎耶『それはピンチの時限定なの？』

文『待ってくださいよ炎耶さん貴方は妹さんと「遊ぶ」だけで「戦闘」になるとは限りませんよ？』

レミリア『着いたわよここがあの子私の妹「フレンドールスカール」の居る部屋よ』

（紅魔館地下）

紅魔館にて（後書き）

最後まで閲覧ありがとうございます!!

## ■最凶の少女VS最高のバカ(前書き)

最新話です!!

今回はフランと闘います!!でも炎耶は弾幕すらも射てないさあど  
うなる!?

## 最凶の少女VS最高のバカ

（紅魔館地下）

レミリア『ついたわここよ。ここにいる私の妹フレンドールと遊んで頂戴すれば取材を受けるわ』

炎耶『……………やだ帰りたいたい取材しなくていいから帰りたいたい!!』

文『何を言ってるんですか炎耶さん!!ここに来て逃げるとは男らしくないですよ?カツコイイ所みせてくださいよ!本当に危なくなったら私が助けますから!』

咲夜『安心してください炎耶様命だけは保証されていますから』

炎耶『俺の人権は?』

レミリア『戯れ言はいいからさっさと行きなさい!!』

炎耶『うう帰りたい…』

（地下フレンドール部屋）

フラン『貴方は誰?』

炎耶『俺か?俺は夜霧炎耶ただの人間さ!!』

フラン『ふーん人間なのね。またお姉様に命令されて来た私の遊び相手?』

炎耶『そうさ!!俺と一緒に遊ぼうぜ?』

フラン『じゃあ私と弾幕ごっこしてくれる?』

炎耶『うん、それ無理』

フラン『エンヤハカタンニコワレナイデネ?』

炎耶『聞こえなかった?俺は弾幕が射てないだからそれは出来ない!!』

フラン『フイクヨ?「禁弾スターボウブレイク」』

炎耶『ちよい無視とかまじないよ!!やばいちよっ命の保証はされてんじやないの!!やばいよ俺死んじやうよ!?!危!?!』

フラン『アハハエンヤハオモシロイネ!』

炎耶『アハハハハ!!フランチャンモウヤメヨウ!!オレノマケダ

カラネ！！オシマイニシヨウヨ！ホカノアソビシヨウ』

(全て被弾)

文『ちよつと炎耶さんどうしたんですか！？いきなり？』

炎耶『アヤアイシテルヨ！！オレトツキアツテヨ！！』

文『炎耶さん！！何恥ずかしい事言ってるんですか！？』

レミリア 咲夜『……………』

フラン『もうやめた…炎耶怖い私のスターボウブレイク受けても立  
ってる…』

炎耶『あり？どうしたのみんな？えっ俺勝ったの？というか体中が  
痛い！！』

文『炎耶さん？まさか今自分がやった行動覚えてないんですか？』

炎耶『まさか俺狂ってた？いや実は俺昔から恐怖が限界点を越えた  
ら自分でも何が何だか解らない状態になるんだよな！ハハ』

(でも本当はもうあの状態にならないように「境界」を兄貴にいじ  
ってもらったんだがいやなんで兄貴にそんな人間離れの事が……？)

フラン『炎耶怖い…人間怖い…』

文『炎耶さん早く取材を終わらせて家にかえりましょ？そしてゆっ  
くりお話ししましょうね』

炎耶『何！？俺が何言っただの！！』

〔紅魔館の部屋〕

文『ご協力ありがとうございました以上で取材を終わります。あと  
他に何か夜つて欲しいことか有りますか？』

レミリア『そうね…貴女の「想い人」がフランを戦意喪失させた事  
も書いておいて頂戴？』

炎耶『えつと文の想い人がフランドールを戦意喪失させた。うん？  
文の想い人！フランを戦意喪失させた？はっ！！俺じゃねえか！！  
まじか文！？』

文『炎耶さん？家にかえりましょうよ。取材は終わりましたよ？』  
レミリア『あらもう帰るのかしら？』

炎耶『はい文も帰ると言ってますし帰ります。取材の協力ありがとう  
ございました！』

## 最凶の少女VS最高のバカ(後書き)

最後まで閲覧ありがとうございます!!

今回頭の可笑しくなった炎耶が文に告りました!!

これでメインヒロインは文に決定しました!!

## 射命丸文と夜霧炎耶（前書き）

お久しぶりです

前回思い付きでやってしまったせいで色々と苦労しました

今回は色々とやってしまいましたwww

それでは最新話をどうぞ！

## 射命丸文と夜霧炎耶

〈文の家〉

文『さてそれでは貴方があの時言った台詞についてしっかりと思いだしてそれにどういう意味があつたのかをちゃんと説明してくれませんか？先に言いますが貴方に拒否権は与えませんさあ答えてください？』

炎耶『……思いだせません無理ですあの状態言葉がカタカナになつてる時の記憶は思いだせませんだから許してください文様』

文『そうなのですかそれなら仕方無いですねと私が言つと思えますか？』

炎耶『思つてません』

文『ならいい加減説明してくださいよすればもう終わりなんですからなんでそう頑固になるんですか？』

炎耶『嫌、本当に分からなくなるんだってだから覚えてないんだよ！』

文『わかりましたそこまでいうなら本当か嘘かを確かめましょう私に付いて来てください！』

炎耶『一体どこに行くんだ？』

文『私の知り合いに会いに行きますその知り合いは「嘘と真を見抜く程度の能力」というを持つてるので貴方が本当か嘘かを確かめてもらいます！』

炎耶『なんて便利な使い捨てキャラだ……』

〈知人の居る場所〉

文『……』という事で貴方に彼を見て欲しいんです』

知人『わかった。文さんの頼みならやりましょう。それでは炎耶さんこちらへ』炎耶『はい』

知人『これは一体どうして!? 何で私の能力が通じないの!?』  
文『どういう意味なんですか?』

知人『私は相手の目を見ればその人の嘘と真を見抜く事ができるのに彼を見ても彼自身しか見えない貴方も見ているこの姿しか見えな  
いんですよ!』

文『口調が整ってないという事は本当みたいですね… 一体どうして彼に通じないんでしょうか?』

知人『まるで何か「異能」の力が働いてるみたいなんですその「異能」の何かが彼への能力干渉を防いでる感じですよ』

文『「異能」ですか… 炎耶さん何か心当たりは無いんですか?』  
炎耶『いや全く無い』

炎耶(とは言っても実は一つだけ心当たりが有るんだよな昔兄貴に掛けられたあの狂うを防ぐ為の封印いやでもあれは狂ってしまったから解除されたみたいだかしな…)

文『うーん… 「異能」ですか「異能」が能力干渉を防いでるとなるとその「異能」をなんとかすれば彼の真実を確かめる事が可能かしそんなことは幻想郷の管理人の彼女後力で境界でもいじらないと無理ですよ… 困りました』

知人『あつ! 私の知り合いに異能の力に強い人が居ますよ彼に頼めばその能力干渉してる力も消せるかもしれません!』

文『あああの有名な彼ですか炎耶さんが来る暫く前に来たあの人ですか! 成る程あの人ならこの力も何とかなるでしょう!! 炎耶さんいそいでください行きますよ? 貴方のその力を消しに!!』

炎耶『異能の力を消す? はて何処かで聞いたことが…』

文『さん居ますか? お久しぶりです清き正しい射命丸です! 貴方をお願いがあつて来ました!』

『ああお久しぶりです射命丸さんそれとそちらの人は初めましてかな俺の名前は上条当麻かみじょうまという歳も近いようだし仲良くしよせ

！！よろしく」

炎耶『夜霧炎耶だよろしく当麻！』

パキーン

炎耶『ウワアアアア！！何だ頭が！』

文『ちよつと炎耶さん！？大丈夫ですか！？どうしたんですか！？上条さん貴方何をしたんですか！』

当麻『いや俺は普通に「右手」で握手をしただけで特に何もあれ「右手」？確か俺の右手は異能の力を打ち消す力のある幻想殺し（イマジンプレイカー）だよな…という事は……射命丸さん！！そいつ何か異能力が有るんじゃない？』

文『はい！それを消して貰う為に此処に来たんですがこれは一体？』

炎耶『ウウ…』

文『炎耶さん大丈夫ですか！？』

当麻『炎耶大丈夫か！？』

炎耶『ああ大丈夫だ…』

炎耶『ちよつと待て文…お前は射命丸文で文屋をやっついていて能力は「風を操る程度の能力」間違いないな？そして当麻…お前は上条当麻で幻想殺しといわれている右手を持っていて間違いないな？』

文『はいそうですがいきなりどうしました？』

当麻『あつてるが何で幻想殺しをしってるんだ？』

炎耶『ハハハ！！成る程成る程！！全て思い出した！！引つ掛かりも全部解けた！！』

炎耶（なるほどな何故当麻まで居るか知らないが俺はあの有名な東方projectの世界幻想郷に幻想入したようだな。いやさせられたのか八雲紫によって成る程そう言うことがどうやら時系列でいうと次は西行寺幽々子の春雪異変か…OKやってやるぜ）

文『ちよつといきなりどうしたんですか炎耶さん！？』

炎耶『悪かったな文どうやら俺はかなり恥ずかしい事をお前に言っ

たようだな…だがあれは本心だそれだけは知っていてくれ』

当麻『結局一体どうしたんだ炎耶？』

炎耶『ああ簡単だ俺は向こうの世界での記憶を思い出しただけだ』

当麻『成る程な誰かが思い出せ無いようにしてたとその人物にも心当たりがあるそういう顔だな』

炎耶『ああそういう事だ。だがそいつに手を出す事は出来ないそんな事をするとなんて終わるからなじゃあな当麻！俺と文は今から取材に行くてくる！！また来るそんな時はゆっくり話そうな』

文『え！？今から取材ですか何処に？』

炎耶『「冥界の白玉楼」だ！！彼処で亡霊の姫に取材するぞ着いて来い！！』

文『炎耶さん！？飛べるようになったんですか！？？』

炎耶『当たり前前だあれも異能の力のせいさ！！』

文『わかりましたなら行きましょう冥界へ！！』

当麻『はあ、いい加減出てきたらどうなんすか紫さん？』

紫『はあい当麻元気かしら？』

当麻『まったくあんなに能力を覚醒させる事を恐れていた貴方が急に能力を覚醒させるために幻想殺しを使ってくれと言いついた時は驚きましたよ』

紫『フッフフ細かい事は気にしないの』

当麻『へいへい』

## 射命丸文と夜霧炎耶（後書き）

最後まで閲覧ありがとうございます！！

今回は物語りを大きく進展させたつもりです

まさかの炎耶が原作知識を思い出す

禁書目録の上条当麻登場ｗｗｗｗ（出すか出さないかかなり迷った）  
等色々やっちゃいました！！そして物語りは原作でいう妖々夢に突  
入です！！

これからもよろしく願います！  
感想とかもくれると嬉しいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7018x/>

---

東方project2次創作～俺が幻想入りしたZE!!～

2011年11月10日03時03分発行